

# スポーツにおける情熱の予備的検討

藤 田 勉 \*

(2011 年 10 月 25 日 受理)

Preliminary Study of Passion in Sport

FUJITA Tsutomu

## 要約

本研究の目的は、スポーツへの情熱を測定する尺度を作成し、尺度の信頼性及び妥当性を検討することであった。対象者は、体育系、教育系の学部 に在籍する大学生 505 名であった。Vallerand et al. (2003) によって開発された情熱尺度を参考にして、スポーツ用の調和的情熱 (Harmonious passion) と執着的情熱 (Obsessive passion) に相当する項目を作成し、探索的因子分析を行った。その結果、調和的情熱因子と執着の因子の 2 因子が抽出された。尺度の信頼性として内的整合性を求めたところ、調和的情熱尺度 ( $\alpha = 0.86$ ) 及び執着的情熱尺度 ( $\alpha = 0.87$ ) のいずれも満足する水準が得られた。尺度間の相関関係については、両情熱尺度は、スポーツコミットメント尺度及び競技意欲尺度と正の相関が示された。また、運動部活動加入者と未加入者の比較を t 検定により行ったところ、調和的情熱及び執着的情熱の両尺度とも加入者の方が未加入者よりも高い値を示した。

**キーワード：**運動部活動、体育、動機づけ、感情、情動

## はじめに

スポーツにおいて優れた競技成績を収めるためには、常日頃から強い情熱を抱いて練習に取り組むあるいは試合に挑むことが重要になるということは誰しも同意することであろう。しかしながら、情熱という言葉は聞き慣れていながらも、心理学において理論的枠組に基づいた研究が始められたのは、ごく近年のことである。

Vallerand et al. (2003) は、日常生活の中で個人が重要と位置づけている活動への価値や興味

---

\* 鹿児島大学教育学部 准教授

を包括する心理的傾向の強さを示す概念として情熱を提唱し、調和的情熱 (Harmonious passion) と執着的情熱 (Obsessive passion) という2つの側面を仮定した。これは情熱の2元モデル (Dualistic model) と呼ばれている。調和的情熱とは、重要としている活動とその他の生活のつり合いが取れている状態であることを意味し、執着的情熱とは、重要としている活動に偏り過ぎた生活になっている状態であることを意味している。競技に取り組む者にとって、スポーツは重要な活動として位置づけられている。そして、スポーツとその他の生活 (例えば、学業、友人関係、家族のことなど) をうまく両立できている者、すなわち、スポーツを生活の一部として上手く調和させている者は調和的情熱が高いといえる。例えば、調和的情熱が高い者は、スポーツに対して強い情熱を抱きながらも、学業との両立が計られており、テスト期間が近づいてもストレスをそれほど感じない生活が送れることが相当すると考えられる。一方、スポーツに偏り過ぎた生活により、その他の生活が怠りがちになっている者、すなわち、スポーツに執着し過ぎている者は執着的情熱が高いということになる。例えば、執着的情熱が高い者は、スポーツに対する情熱が過度になり過ぎて、学業を怠ってしまい、テスト期間が近づくと強いストレスを感じながら生活を送ることになってしまうことが相当すると考えられる。

Vallerand et al. (2008) は、エリートスポーツ選手を対象とした調査を行った結果、執着的情熱と調和的情熱の両方が高い者ほど、熟達目標 (Elliot & Church, 1997) を強く抱き、意図的で計画的な練習 (Ericsson et al., 1993) がなされ、競技力が高いことを報告した。すなわち、スポーツの継続を支えている競技意欲には執着的情熱と調和的情熱の両方の強さが必要であることが示された。しかしながら、執着的情熱と調和的情熱には、それぞれ異なった働きがあることも報告されている。Rousseau & Vallerand (2008) の研究では、健康運動教室に参加した高齢者を対象として縦断調査を実施したところ、執着的情熱はネガティブ感情に影響すること、調和的情熱はポジティブ感情に影響すること、Philippe et al. (2009) の研究では、青年から高齢者を対象とした余暇活動の調査を行ったところ、調和的情熱を強く抱いている者は執着的情熱を強く抱いている者より Well-being が高いことが示されている。また、Lafrenière et al. (2011) の研究では、スポーツ参加者のみの情熱を問題とするのではなく、コーチのスポーツ指導への情熱が指導スタイルに影響し、選手が認知するコーチとの人間関係に影響することが示されている。

これらの他にも、ギャンブル (Vallerand et al., 2003; Mageau et al., 2005; Philippe et al., 2007)、ゲーム (Lafrenière et al., 2009, 人間関係 (Séguin-Lévesque et al., 2003)、教師行動 (Carbonneau et al., 2008)、自動車の運転 (Philippe et al., 2009) などの研究が展開されており、おおよその結果としては、動機づけのような行動的側面へは執着的情熱と情熱的情熱の両方の強さが必要とされるのに対して、感情などの情動的側面へは、執着的情熱は負の影響、調和的情熱は正の影響を示すことが報告されている。情熱研究の知見として特に興味深いのは、重要と位置付けている活動への情熱が日常生活全般における Well-being へも影響することである。Vallerand (2007) によれば、情熱を強く抱いている活動とは、日常生活において非常に重要な活動であることを意味しており、活動

へ費やす時間が長ければ、投資する金額も大きく、日常生活への影響があるのは考えられることだとしている。例えば、競技に取り組む者であれば、仕事や学業以外の時間はほとんどがスポーツに費やされ、シューズやトレーニングウェアなどの用具のみならず、食事や体調管理（リハビリやマッサージなど）に投資する金額が大きくなるのが相当すると考えられる。

今日までの報告からすると、情熱研究の知見は有益であり、今後もさらなる発展が期待される。情熱の2元モデルを提唱した Robert Vallerand は、内発的・外発的動機づけ階層モデル（Vallerand, 1997）の提唱者でもある。彼は多くの構成概念を内発的・外発的動機づけ階層モデルに収束することで行動の心理的メカニズムの解明を試みてきたが、情熱研究では構成概念を2つにしておき、複雑化していったモデル（内発的・外発的動機づけ階層モデル）からシンプルなモデル（情熱の2元モデル）へと方向転換した点が興味深い。しかしながら、わが国においては情熱に関する研究はどの分野においてもまだ始められていないため、現在のところ、何の知見もない。スポーツにおける情熱研究を展開していくためには、まずは、スポーツへの情熱を測定する尺度を開発することが必要になる。そこで本研究では、スポーツへの情熱を測定する尺度を作成し、尺度の信頼性及び妥当性を検討することを目的とする。

## 方法

### 調査対象と調査方法

教育系、体育系の学部を有する3つの大学に所属する大学生（505名）を対象とした質問紙調査を行った。調査対象のうち、運動部加入者は、243名、未加入者は、262名であった。スポーツへの情熱を測定するため、競技選手を対象とするべきであるが、尺度の妥当性の検討のために競技をしていない者も対象にする必要があった。なぜなら、競技をしている者であれば、競技をしていない者よりも情熱尺度の得点が高くなるはずだからである。調査票は各大学の教員から学生へ直接配布され、回答終了後に回収された。

### スポーツへの情熱を測定する項目

Vallerand et al. (2003) の情熱尺度は、当初、ギャンブルへの情熱尺度として開発されたが、尺度の項目は、例えば、“This activity is in harmony with the other activities in my life.”（調和的情熱尺度の項目）というものであり、“This activity”の部分を変えることで他の領域にも応用されている。スポーツへの情熱研究では、“activity”の部分を“sport”としたものが使用されている。情熱尺度は、調和的情熱尺度と執着的情熱尺度によって構成されていることから、本研究もオリジナル版を参考にしながら、調和的情熱尺度と執着的情熱尺度を想定した日本語版スポーツへの情熱尺度を作成した。オリジナル版を日本語にした場合、ほとんど同じ表現になってしまう項目がいくつかあったため、意味を損なわないよう項目の表現を工夫しながら尺度を作成した。各項目への回答方法は、「全く当てはまらない(1)」から「よく当てはまる(5)」の5件法とした。

### スポーツコミットメントを測定する項目

Vallerand (2007) は、スポーツコミットメントと情熱を類似した概念であるとしている。このことから、本研究では、スポーツへの情熱尺度とスポーツコミットメント尺度（金崎・橋本, 1998）の相関を検討する。スポーツコミットメント尺度は、4問で構成されており、本研究においてもそのまま使用した。尺度の信頼性の検討として内的整合性を算出したところ、 $\alpha = 0.80$  という高い値が示された。

### 競技意欲を測定する項目

先行研究（例えば、Vallerand et al., 2007）では、調和的情熱及び執着的情熱の両方と動機づけ関連要因に正の相関が示されている。そこで本研究においては競技意欲との相関関係を検討する。競技意欲を測定する項目は、徳永・橋本（1988）の心理的競技能力検査の中から、競技意欲を測定する尺度（勝利意欲、自己実現意欲、忍耐力、闘争心）を使用した（計 16 問）。尺度の信頼性の検討として内的整合性を算出したところ、 $\alpha = 0.89$  という高い値が示された。

## 結果

### 因子分析

スポーツへの情熱を測定する項目について主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。初期の固有値が、1.00 以上、各因子を構成する項目の因子負荷量が、0.40 以上で解釈可能な因子構造になることを条件として分析を繰り返したところ、調和的情熱因子と執着的情熱因子の 2 因子が抽出された。因子間の相関は、0.51 であった。先行研究においても中程度の相関が示されることが多く、この相関関係は妥当であると解釈できる。各因子を構成項目数は、それぞれ 5 問であった。各因子を構成した項目を尺度として、尺度の信頼性を検討したところ、調和的情熱尺度（ $\alpha = 0.87$ ）及び執着的情熱尺度（ $\alpha = 0.86$ ）のいずれも高い値が示された。

表 1 探索的因子分析の結果

因子名	項目	1	2
執着的情熱 ( $\alpha = 0.87$ )	スポーツは、自分を奮い立たせる唯一の活動である	0.87	- 0.03
	スポーツは、私にとって唯一の生きがいである	0.83	- 0.01
	我を忘れるくらいスポーツをすることに必死である	0.83	- 0.02
	スポーツに夢中で、他の事を怠ってしまうことがある	0.67	0.04
	スポーツをするだけで生きていけたらいいのと思っている	0.63	0.02
調和的情熱 ( $\alpha = 0.86$ )	スポーツは、日常生活の質をほどよくする活動である	- 0.05	0.83
	スポーツは、日常生活のバランスを適度に保つのによい活動である	- 0.16	0.82
	スポーツは、よい人生経験になる活動である	0.05	0.77
	スポーツをしていると、改めてスポーツの良さに気づくことがある	0.10	0.68
	スポーツをしていると、日常生活が快適に過ごせる	0.24	0.58
		-	
		0.51	-

### 基本統計量及び尺度間の相関

調和的情熱尺度及び執着的情熱尺度の基本統計量（平均値、標準偏差、歪度、尖度）と、スポーツコミットメント及び競技意欲との相関関係を表2に示した。なお、調和的情熱及び執着的情熱の基本統計量は対象者全員のデータである。また、スポーツコミットメントの基本統計量及び情熱との相関関係は、運動部加入者46名、未加入者220名（計266名）のデータであり、競技意欲の基本統計量及び情熱との相関関係については運動部加入者（197名）のみのデータである。調和的情熱尺度の平均値を見ると、4.11（5点満点）であり、歪度も-1.55と偏っているため、正規分布からはほど遠い分布となった。これは、本研究の対象者が教育系、体育系の学部生であったことから、スポーツに対して肯定的な意識を持った者が多かったのかもしれない。この点については、対象者のバランスも考慮して今後も検討していく必要がある。尺度間の相関関係について、調和的情熱尺度と執着的情熱尺度には中程度の正の相関（ $r=0.48$ ）が示された。スポーツコミットメント尺度は、調和的情熱尺度と中程度の正の相関（ $r=0.60$ ）、執着的情熱尺度と高い正の相関（ $r=0.71$ ）が示された。競技意欲尺度は、調和的情熱尺度と弱い正の相関（ $r=0.33$ ）、執着的情熱尺度と中程度の正の相関（ $r=0.43$ ）が示された。

表2 基本統計量と尺度間の相関関係

	N	平均値	標準偏差	歪度	尖度	1	2	3	4
1 調和的情熱	505	4.11	0.76	-1.55	3.25	—			
2 執着的情熱	505	2.49	1.05	0.20	-0.99	0.48	—		
3 スポーツコミットメント	266	2.36	0.69	-0.01	-0.51	0.60	0.71	—	
4 競技意欲	197	3.75	0.66	-0.52	0.21	0.33	0.43	—	—

### 運動部加入者と未加入者の比較

調和的情熱尺度と執着的情熱尺度の得点を運動部加入者と未加入者で比較するため、t検定を行ったところ、調和的情熱尺度及び執着的情熱尺度の両方とも、加入者の方が未加入者よりも1%水準で有意に高いことが示された（表3）。

表3 運動部加入者と未加入者の比較

	加入（243名）		未加入（262名）		t 値	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
調和的情熱	4.31	0.58	3.92	0.85	-5.90	$p<0.01$
執着的情熱	3.01	0.89	2.01	0.96	-12.1	$p<0.01$

### 考察

本研究の目的は、大学生を対象として、スポーツへの情熱尺度を作成し、尺度の信頼性及び妥当性の検討をすることであった。探索的因子分析の結果、調和的情熱と執着的情熱の2因子が抽

出された。尺度の信頼性を検討したところ、内的整合性は満足する水準であった。尺度間の相関関係については、情熱に関連があると考えられているスポーツコミットメントや競技意欲と正の相関が示された。これは、調和的情熱及び執着的情熱が高い者は、スポーツコミットメントや競技意欲も高いことを示している。情熱がスポーツコミットメントと類似した概念であること (Vallerand, 2007)、また、情熱と動機づけ要因である熟達目標に正の関連が示されたこと (Vallerand et al., 2008) からすれば、本研究の結果は妥当であると解釈される。運動部加入者と未加入者で情熱の比較を行った結果、加入者は未加入者よりも調和的情熱及び執着的情熱の両方が高いという結果となった。これは、加入者の方が未加入者よりもスポーツへの情熱が強いことを示しており、この結果についても妥当であると解釈される。

以上のことから、本研究で作成したスポーツへの情熱尺度の信頼性及び妥当性は許容できるレベルであると考えられるが、さらに検討を重ねていく必要はある。Vallerand et al. (2008) の研究では執着的情熱と調和的情熱の両方が熟達目標に正の影響を示したが、Rousseau & Vallerand (2008) の研究では執着的情熱はネガティブ感情に影響することと、調和的情熱はポジティブ感情に影響することが示されている。すなわち、調和的情熱と執着的情熱にはそれぞれ異なる機能があると考えられるが、本研究ではそれぞれの情熱が持つ特徴までは明らかにされていない。今後は2つの情熱それぞれにどのような機能があるのかを検討していく必要があるだろう。情熱研究はまだ始まったばかりであり、発展していく可能性は十分にある。今後も尺度の信頼性及び妥当性の検討を追求していくことに加え、新たな知見を見出すための展開も考えていく必要があると考えている。

## 文献

- Carbonneau, N., Vallerand, R.J., Fernet, C., & Guay, F. (2008). The role of passion for teaching in intra and interpersonal outcomes. *Journal of Educational Psychology*, 100, 977-987.
- Elliot, A.J., & Church, M.A. (1997). A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 218-232.
- Ericsson, K. A., Krampe, R. Th., & Tesch-Römer, C. (1993). The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological Review*, 100, 363-406.
- 金崎良三・橋本公雄 (1998). 青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続化に関する研究－中学生・高校生を対象に－. *体育学研究*, 39, 363-376.
- Lafrenière, M.-A. K., Jowett, S., Vallerand, R. J., & Carbonneau, N. (2011). Passion for coaching and the quality of the coach-athlete relationship: The mediating role of coaching behaviors. *Psychology of Sport and Exercise*, 12, 144-152.
- Mageau, G.A., Vallerand, R.J., Rousseau, F.L., Ratelle, C.F., & Provencher, P.J. (2005). Passion and gambling: Investigating the divergent affective and cognitive consequences of gambling. *Journal of Applied Social Psychology*, 35, 100-118.
- Philippe, F., & Vallerand, R.J. (2007). Prevalence rates of gambling problems in Montreal, Canada: A Look at old adults and the role of passion. *Journal of Gambling Studies*, 23, 275-283.
- Philippe, F., Vallerand, R.J., Lavigne, G. (2009). Passion does make a difference in people's lives: A look at well-being in passionate and non-passionate individuals. *Applied Psychology: Health and Well-Being*, 1, 3-22.
- Philippe, F., Vallerand, R.J., Richer, I., Vallières, E.F., & Bergeron, J. (2009). Passion for driving and aggressive driving behavior: A look at their relationship. *Journal of Applied Social Psychology*, 39, 3020-3043.

- Rousseau, F.L., & Vallerand, R.J. (2008). An examination of the relationship between passion and subjective well-being in older adults. *International Journal of Aging and Human Development*, 66, 195-211.
- 徳永幹雄・橋本公雄 (1988). スポーツ選手の心理的競技能力のトレーニングに関する研究 (4) - 診断テストの作成 - . *健康科学*, 10, 73-84.
- Séguin-Lévesque, C., Laliberté, M.L., Pelletier, L.G., Vallerand, R.J., & Blanchard, C. (2003). Harmonious and obsessive passions for the Internet: Their associations with couples' relationships. *Journal of Applied Social Psychology*, 33, 197-221.
- Vallerand, R.J., Mageau, G.A., Elliot, A., Dumais, A., Demers, M-A., & Rousseau, F.L. (2008). Passion and performance attainment in sport. *Psychology of Sport & Exercise*, 9, 373-392.
- Vallerand, R.J., Blanchard, C. M., Mageau, G.A., Koestner, R., Ratelle, C., Léonard, M., Gagné, M., & Marsolais, J. (2003). Les passions de l'âme: On obsessive and harmonious passion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 756-767.